

ことは出来なくなつた事情である。しかしねがわくは、この研究を事情の許すかぎり「副業」と墮せしめず更に高められることを、ルネサンス研究者の立場より心から説得したい。

杉浦氏のすぐれたこの研究は、ヨーロッパの歴史に関心のあるひとびとはいうまでもなく、むしろその専門以外のひとびとにこそ読んでいただきたいとおもうのである。研究者に裨益するところ多大であるばかりでなく、ルネサンスに全く無知なひとびとをも熱中せしめずにはおかない魅力さえも持つ書物であるから。(本文四一六頁、定価六八〇円、未来社刊) —永井三明—

末松保和著

新羅史の諸問題

本書は末松博士の学位請求論文であり、「新羅史の新研究」と題して東京大学に提出され、昭和二十六年審査を通過して学位を得られた論著で、今回頭書の如き書名に改めて東洋文庫論叢第三十六として公刊されたものである。本研究の内容及び学問的評価は、既

に論文審査要旨として公表されているから、ここに改めて紹介することは蛇足を加えるの愚を敢えてするに過ぎないであろうが、学位論文の審査という公的な立場とはおのずから異なる紹介論評も無意味でなからうし、それにもまして本書のような特殊な研究が公刊されたことは、同好の学徒には、まことに同慶事であり、このよろこびから一言を呈せざるを得ないものがある。

著者の学究歴を簡単に顧ることは、本書の学問的価値を理解する為の基盤となるであろう。あるいは、研究年譜を紹介するほどの年配ではないと、著者から苦情が出るかも知れぬが、本書は著者の研究生活を劃するメモリアルである。著者は東京帝国大学卒業後直ちに京城に赴き、朝鮮史編修会の修史官として、ついで京城帝国大学の教職につき朝鮮史第二講座を担当し、終戦の年に及ぶまで二十一年に近い年数を、朝鮮史研究の最好条件のもとに過ぎたのであつた。その間、「朝鮮史」第一編三巻・第二編一卷、及び第五編などの撰修を担当し、一方個人的な研究として多くの論文を「靑丘学叢」「史学雜誌」「朝鮮」京城帝国大学文学会「史学論叢」などに発表

された。本書の内容をなす九篇の論文はそれら既発表の内に含まれて居り、今それに増訂補正を加えられたものである。著者の研究は広く朝鮮史一般に亘つているが、就中新羅史の研究に力を注がれ、それを一括して単行本とされたことは、自ら許すに会心の作となす所以であろう。同学の学徒から見ても末松博士のすぐれた作品がそこに集められていることに異論はあるまい。

本書は下文に紹介する九篇の論文の外に、「新羅史研究の回顧」と題する序文と、附録とが加えられているが、その序文の研究回顧は、新羅史の研究史的梗概であつて、将来朝鮮古代史の研究に志すものにとつては、研究の契として甚だ便利なものであり、次いで序文後半は本書所収の九篇の論文の自己紹介で、内容の梗概的説明に当てられている。まことに深切な序文である。私も一度こんな深切な本を書いて見たいとさえ痛感した。この序においてのみではなく、考証の複雑難解な本文の論考の随所にも見られるところである。論を好んで自ら快とするのではなく、そこに説得的愛情が盛られているのも、その人

柄のしからしめる所以であろう。とはいへ門外の読者にはやはり面倒な論文かも知れない。著者が研究史的回顧を試みられていることは、先学の研究を尊重し、それを集大成して自らの研究基盤とするという、最も着実妥当な研究態度とも通ずるものである。この点こそ今日の後進学徒の学ぶべき一事ではあるまいか。勿論著者はそうした基盤に立つて、しかも独自の見解を展開して行くのである。以下紙面の許す範囲で論文の内容を簡単に紹介したい。

第一篇、新羅三代考——新羅王朝史の時代区分。新羅史に関する「三国史記」「三国遺事」それぞれを三分を吟味し、両説を併せ採りつつ、著者独自の五期に分つ見解を示す。そのよりどころとして新羅王系、婚姻法、社会組織などが採り上げられており、またこの時代区分が著者の新羅史に対する総合的理解とその研究態度を示唆している。

第二篇、新羅上古世系考。始祖から第二十二代智証王までの氏姓の構成を論じ、特に王・王父・王母・王妃の名の言語的詭解に力を傾け、原始的太陽崇拜を論証しようとする。

第三篇、新羅建国考。上古のうち奈勿王以後を半歴史時代と推断し、一方「魏志」などの中国史料を検討して、辰国及び辰韓十二国の問題を論じ、次に新羅国の成立には高句麗の政治的・軍事的援助の大きかったことを認め、新羅王号「麻立干」を高句麗起原と論断する。

第四篇、新羅中古王代考。法興王から真徳王に至る六代の時期の特色として、王妃王母に朴氏の多いこと、及び葛文王なる称呼が集中していることを指摘し、王室の婚姻法、女系の継承などの問題に論及する。

第五篇、新羅仏教伝来伝説考。仏教公認の法興十五年戊申は十四年丁未に是正すべしとし、またそれにからまる伝来伝説は四段階を経て成立し、殉教者異次頓の話はその最後に成立したと推断する。

第六篇、新羅六部考。これは次の輻停考とともに、本書中最もすぐれた作品である。六部に関する「三国史記」「三国遺事」「日本書紀」「金石文」などの史料を成立年代的考証の論拠として活用し、最初は三部（喙部・沙喙部・本液部）で、支配者の組織らしく、それが六部となり、統一後は王京の地区別の

名として残り、永く高麗期にまで残存した。

第七篇、新羅輻停考。新羅王国の發展の根元たる軍事組織としての輻と停に関する詳細な論考であり、そこに言語的詭解を試み、輻を高句麗起原と推定する。新羅の軍事・政治の歴史研究の重要な項目を設定した好論である。

第八篇、梁書新羅伝考。新羅伝の後半、特に六喙評五十二邑勅に関する考証で、六喙評に統一時代の王京周辺の六停を推当する。

第九篇、新羅下古諸王薨年存疑。武烈王以後末王に至る二十八代のうち、第三十三代聖徳王などの七王の薨年に疑いを存すべしとなす。

附録、新羅の金石文に関する六篇すなわち昭和四年以後に発見された金石文のうち六史料の紹介であり、特に終戦後の昭和二十一年慶州古墳で発見された好太王壺杆銘——乙卯年国岡上広開土地好太王壺杆十——はまだ一般に知られていないかも知れないから、注意したい。

以上簡単な紹介に終始したが、著者の史料蒐集にはまことに丹念なものがあつて、考証また甚だしく精緻であり、歴史研究の正統派的

論考として尊重に値いする。勿論拙見とはその研究方法において、またその個々の結論において相違するところ決して少なくない。其は、どうしてこれだけ違ふのだらうと、本書を眺めながら自らを省みている。今一つ本書の研究法の特徴は朝鮮古語の語学的説解を活用していることである。金沢・前間・小倉・鮎貝諸先生の古語研究の成果を自家彙籠中のものとして、それを縦横に駆使された観があるが、古語説解には多くの想定が含まれているとともに、それを歴史研究の上に利用するところに多くの問題がある。それには先ず言葉と生活、言葉と文化などの一層根本的な一般問題が検討されねばならない。今日新しく開拓されつつある人文諸科学がそれらに関する好テーマを提示しており、史学者もまた、それに学ばねばならぬ節々がある。それとともに新羅古代社会構造に関する論及においても、多くの補助学の知識を必要とするであらう。(五三五頁、東洋文庫発行、非売品)

—三品彰英—

Herman Lautensach, Der Geographische Formen-

wandel. Studien zur Landschaftssystematik. Colloquium Geographikum. Bd. 3. (1952)

ラウテンザッハンの Geographische Formenwandel 説は、ボン大学において例年開催されるリヒトホーフェン記念談話会の、一九五一年度の席上において初めて発表されたものであるが、実はクルーテの Handbuch der Geogr. Wissenschaft の「一般地理学」の巻に、すでに現行の構想には近い見解を主張しており、爾来二十二年間、彼のとりくんできた問題である。

この彼の Geogr. Formenwandel とは Geogr. Substanz の規律的な空間的ザッハーシオンであつて、いまははやりの動態的研究のとり扱う時間的な変遷ではない。では Geogr. Substanz とは何か。——方法論をかたる

は概ねポバツク及びシュミットヒューゼンに従つて、若干の概念規定をもつて開始される。即ち Geogr. Substanz とは地表になつて

観相的に把握できるすべての地理的な Stoffbereich であり、その構成要素が個々の Geogr. Form であつてこれにサワワーのいわゆる Form とはほぼ同義である。Form は無機界・生物界あるいは精神界のいずれの所産に属しようとするにはかかわりないので、従来慣用の Geofaktor なる語に代るものである。

Geogr. Erscheinung なる語はこのうち特に交通・漁獵など動的な Form に対して適用される。Geogr. Raum という場合はその考察の観点の如何にかかわりなく、任意の大きさの地表の一区域をなし、Geogr. Gebiet という場合は個々の Form や Erscheinung の分布範囲を指す。また Landesnatur が当該地域のすべて

の無機的構成物である。
この Land と Landschaft の概念を最初に峻別としておくことが、本論の理解のために必須のことであらう。なぜなら Formenwandel 説のとり扱うのは Landschaft であつて Land ではない。ラウテンザッハンは両者を規定して Land とは空間個体 Raumindividuum